

---

## 短編 挑戦レッド

ケースケ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

短編 挑戦レッド

### 【Nコード】

N0555N

### 【作者名】

ケースケ

### 【あらすじ】

自分が最強だと思う、俺はシロガネ山であいつに出会う・・・

**（前書き）**

ポケモン替え歌聴いてたら書きなくなった、反省はしていない。

俺に敵は居なかった・・・

向かってくるトレーナーにはモンスターボール一個で全てが終わっていた。

カントーからシンオウまでのジムの全てに挑戦した、中には強いところもあったが、結局俺には倒すには足りなかった。

四天王にも挑戦した、チャンピオンにも、初めてだった、手持ちのポケモンを3匹削られたのは、でも俺を倒すにはいたらなかった。

そいつの名前はゴールドという名前だった。

そして、今、俺は更なる高みを目指し、シロガネ山にやってきた。

やはり、シロガネ山の野生のポケモンは強かった。でも、俺には適わない。出てくるポケモンをなぎ倒して進んでいた。

神聖な空気漂う空間を潜り抜け、とうとう頂上にたどり着いた。

そこには一人の男がたたずんでいた。

俺がたどり着いたと同時にその男は急に振り返り、俺にこ言い放った、

「・・・俺を本気にさせてくれるか？」

そういつて、男は腰にあるモンスターボールを手に取り、カビゴンを出してきた。

良く育ったカビゴンだ、今まで見たカビゴンの中でもっともでかい。

おもしろい、

そお思つて、俺は腰にあるモンスターボールを取り出した。

「出る、メタグロス」

そうやって出てきた、メタグロス、これも野生とは比べ物にならないほど強い。

「君は・・・強いんだろう？」

男はそういつて、それと同時に戦いが始まった。

「メタグロス、コメットパンチ」

メタグロスは手に力をため、一気にカビゴンに近づく。

そんな、俺らをあざ笑うかのように、レッドは言った。

「カビゴン、じしん」

急に地面が揺れ、メタグロスの足が止まる。  
地が割れて、メタグロスの足を飲み込む。

「メタグロス、電磁浮遊」

そう、指示を出し、メタグロスが地面に飲み込まれるのを防ぐ、  
すでにメタグロスは、HPが半分以下になっている。

それに追い討ちをかけるように、男はカビゴンに命令した。

「ほのおのパンチ」

その言葉にカビゴンの手が発火した。  
そして、メタグロスへ距離を詰める。

「メタグロス、避ける！」

しかし、宙に浮いた、メタグロスはたいした回避行動を取ることが  
直撃してしまった。

気を失ったのか、電磁浮遊が解けて、地面に倒れこむ。

「良くやったメタグロス、戻れ」

モンスターボールにメタグロスを戻す。

此処までとは……

俺のメタグロスが何も出来ずに一方的になぶられるとは……

俺は、懷から、もう一つのモンスターボールを取り出す。

「いけ、カイリユー」

そういつて、出したのはドラゴンタイプのカイリユーこいつなら、炎を地面もあまりきかないはずだ。

「カイリユー電磁波」

命令に従い、カイリユーは目の前に目に見えるほどの電気を出し、カビゴンにぶつける。

カビゴンは体に電気を纏い、マヒ状態になる。

男は、それに対してなんのアクションもせずに、不敵に笑う。

「カビゴン、のしかかり」

その命令を実行しようとする、カビゴンだが、体がしびれていて、動かない。

その隙を見逃すほど、馬鹿じゃない、

「カイリユーきあいパンチだ」

痺れたカビゴンに近づき、その一撃を食らわせる。

格闘技だ、効果は大きい。

カビゴンの顔が苦痛にゆがむ。

男は指してあせた様子はない。

「カビゴン、電磁波だ」

痺れた体を動かし、電磁波を出す。

その一撃は見事に命中する。  
カイリユーもマヒしてしまった。

「カイリユー きあいパンチ」

その一撃で、カビゴンは戦闘不能に陥ってしまう。

男はカビゴンをボールに戻した。

「ありがとう、カビゴン」

「いけ、ラプラス」

次に出したのは、水タイプだ。

「カイリユー 電磁波だ」 「ラプラス 吹雪」

先に指示を出したのは俺だ。

しかし、カイリユーは体が痺れて動くことが出来なかった。

そして吹き荒れる吹雪。

まずい、カイリユーに氷タイプの技は・・・！

思った時には遅く、カイリユーのHPはどんどん削られた。

もう、体力はそんな残っていないだろう。

「カイリユー りゅうせいぐん！」



最後にカイリユーに命令を出す、  
その攻撃は見事命中するが、再び相手の吹雪により、カイリユーは  
戦闘不能に陥った。

りゆうせいぐんを受けて尚、ラプラスの体力はまだまだありそうだ。

どれだけ育てればあなるのか、検討もつかない。  
しかし俺のポケモンも負けていないと信じたい。

カイリユーを自分のモンスターボールに戻す。

「お疲れ、カイリユー」

すると、男もラプラスをモンスターボールに戻した。

相手が何を出してくるのか分からない状態・・・

この状態弱点の少ないポケモンを出すのが定石だが・・・

「出る、バンギラス」

俺が出したのはバンギラス、こいつにはいつも助けられている。

「いけ、リザードン」

男が出したのは、リザードン、タイプの上でも此方が有利だ。

先に動いたのは男だ、

「リザードンにほんばれ」

その言葉と同時に、空は快晴になる、先ほどまで、天を映す様子は

なかったのだが。

「バンギラス、ストーンエッジ」  
これで、リザードンは終わりだ。

しかし、ストーンエッジは空中に逃げて、かわされてしまう。

っち！これだからストーンエッジは・・・

男はその様子を見て、軽く笑みを浮かべた、  
「リザードンだいもんじ」

空中に飛んでいる、リザードンは地面に向かい、大きなだいもんじの炎を放った。

岩タイプのバンギラスにだいもんじだと？  
そんなの効かないに・・・

そのだいもんじは、見事バンギラスに命中し、大きく大地を焦がす。  
バンギラスはそれでも、体力が大きく削られた。

いまひとつの、炎であれだけ食らうとは・・・

でも、これで終わりだ

「バンギラス、ストーンエッジだ！」

その技は、空中に飛んでいる、リザードンに命中する。

ダメージに空中から落ちてくる、リザードン、

これで、後4体。

そう思った、矢先、倒れたはずのリザードンからだいもんじが飛んできた。

つな！！あれを耐えたのか！

此方のバンギラスはもはや虫の息だ。

しかも、先ほどの一撃で、やけどを負ってしまった。  
このターンでしとめなければ、死ぬのは此方だろう。

「っち！バンギラス冷凍パンチ！」

その攻撃で、リザードンは崩れ落ちる。

しかし、同時にバンギラスもやけどのダメージで息絶えてしまう。

「戻れ、バンギラス」

これで、此方の手持ちは後3体、

あちらは、4体。

次に出すポケモンは・・・

「いけ！ウィンディ」

基本氷が大ダメージの自分のパーティの氷対策専門だ、  
かといっても、対普通戦闘が弱いというわけではない。炎タイプの  
技では大いに活躍を期待できる。

「出る、ラプラス」

男が出したのは、こちらのタイプにそぐわない、水タイプだ。

こちらの不利には変わらないが、あのラプラスは、先ほど、カイリ  
ユーのりゅうせいぐんですでにダメージを受けている。

倒せないことはない。

「ウィンディ！神速」

神速のスピードで先手のダメージを与える。

これで倒れてくれれば恩の字だ、

しかし、男のラプラスは虫の息だがかるうじで戦えるようだ。

相手は水タイプだ、フリだが、このウィンディも相当育ててきた。  
多分ハイドロポンプの一撃も耐えることが出来るだろう。

そう考えた矢先、

「ラプラス、ぜったいれいど」

そう、一撃必殺の一撃が放たれた、その一撃は、ウィンディを凍り  
つかせ、戦闘不能に追いやった。

想定外だ、此处に来て、一撃必殺が出るとは思いもしなかった。

「戻れ、ウィンディ」

「戻れ、ラプラス」

男も瀕死のラプラスを戻した。

「俺を楽しませてくれるんじゃないのか？」

そこで、男が口を開いた。

その言葉で、一気に頭に血が上る、しかし、挑発にのっでは冷静な  
判断を下せなくなる。

俺はその言葉を見殺して、次のポケモンを繰り出した。

「出る、ガブリアス」

そう、こいつは俺の切り札、パーティの中でもっとも高い攻撃力を  
保持している。

男は、そのモンスターを見やり、モンスターボールを出した。

「行け、カメックス」

出てきたのは、またも、水タイプのポケモン、

先手必勝、

「ガブリアス！じしん」

この技は、先ほど、メタグロスが沈められた技だ、浮かぶ手段を持たない、カメックスなら、地面にはめて、一気に畳み掛ける、

想像通り、カメックスは地面に嵌り、多大なダメージを受けている、

「ガブリアス、畳み掛けるぞ」

そう命令し、ガブリアスを近づかせようとすると。

「カメックス、ハイドロカノン」

男が言うと、カメックスは向かっていくガブリアスに照準を定めた、

「ガブリアス！まゝ」

その言葉は間に合わず、大きな水の砲台がこちらに向かって放出された。

その水流は、ガブリアスに多大なダメージを与えた。

多分体力は3/4は持っていかれただろう、

しかし、相手も、地震で弱っている、此処で畳み掛ければ！

「カメックス、アクアジェット」

「ガブリアス！ドラゴンクロー」

相手のほうが、早かった、相手のアクアジェットがガブリアスに命中し、またも戦闘不能に追いやられた。

「戻れガブリアス、ありがとう」

男も、カメックスを手持ちに戻した。

これで、俺は後1匹、

相手は4匹。

この男まさか此処まで・・・

負けるのか？いままで一度も負けたことのない俺が負けるのか？

俺は、震える口を開いた。

「お前、名前は？」

「俺か、俺はレッド」

男は続けていった。

「さあ、バトルの結末を魅してくれ！君と俺がどっちが勝つのか！」

そういつて、レッドはモンスターボールを投げた、そこから出てきたのは、フシギバナ、それも平均の倍はあるだろう、

大きさの。

俺は・・・まけない。

「出てくれ！ルカリオ」

俺の手持ちのパーティの中で、もっとも俺と付き合いが長く、もっとも強いポケモンを出す、

こいつが通じなけりや俺の負けだ。

「ルカリオ！ブレイズキック！」

ルカリオは、今までのポケモンの中でもっとも早い動きで、フシギバナに近寄る、

しかし、

「フシギバナ身代り」

ほのおのパンチがあたったのは、フシギバナの身代りだった。

ルカリオは、そのせいで、フシギバナを見失ってしまう。

「フシギバナ、ソーラービーム！！」

背中に光が集められる、先ほどのリザードンの日本晴れで集約率は上がっている。

その一撃は、ルカリオの背中を捕らえる。

「っルカリオ！！」

多大なダメージを受けながらも、ルカリオは、立ち上がる。

「ルカリオ、ブレイズキックだ！」



先ほどのように、身代りではなく、本物の、フシギバナに攻撃は命中する。

苦痛に顔をゆがめながら、フシギバナはまだいけそうだ。

「フシギバナ、ソーラービーム」

さらにフシギバナで詰めにきた、しかし、

ここで負けられねえ！

「ルカリオ！神速だ！！」

相手の光が溜まりきる前にルカリオの攻撃が直撃した、その一撃で、フシギバナは戦闘不能に陥った。

「戻れ、フシギバナ、良くやった」

「君は強かったよ、ピカチュウ、いつてくれ」

その言葉に今までレッドの肩にのっかって居たぴかちゅうが、地面に降りる。

「こいつは、俺のパーティで一番強い、そう、君にとってのルカリオのような存在だ」

その言葉に、レッドは後ろを向く、

「今度はもつと本気にさせてくれよ？」  
その言葉にはどこか寂しさが感じられた。

なにを言っ てやがる！

もう、終わったみたいなの口して、まだ終われねえ

「ルカリオ！しんす「遅い、かみなり！」

俺の命令はさえぎられ、ピカチュウの一瞬からだか帯電したかと思うと、

次の瞬間には、ルカリオに激しい雷が落ちた。

その一撃で、ルカリオは戦闘不能に陥って。

そこで、俺の視界は真っ白に染まった。

「またやったのかい？レッド、今度はどうだった？」  
後ろから物音が聞こえたと思い、その言葉の主を頭に浮かべながら

振り返る。

「グリーンか・・・今回は白熱したよ、もう少し修練すれば、俺を本気にさせてくれるかもしれない」

その言葉にはどこか嬉しさがにじみ出てる。

「へえ君がそこまで言う相手か・・・僕も一度やってみたいかも知れない」

グリーンと呼ばれる男は、興味深げに倒れた男を見ていた。

レッドは振り返ってまた下に向かって歩き出した。

「お前とはいい勝負だよ、そいつ、麓のポケモンセンターに連れてってやって」

そう言い残し、レッドは、洞窟の奥に姿が消えていった。

「レッド・・・君を満足させるトレーナーに会えるのだろうか・・・」

目が覚めると、シロガネ山の麓のポケモンセンターに居た。

自分の両手を見つめながらつぶやく。

「俺は負けたのか・・・レッド・・・か、強いな」

もう一回鍛えなおすか、最初の町から・・・

まってるよ！レッド、俺はいつかお前に追いついてやる！！

(後書き)

レッドいいよね^^

原点にして頂点のレッドかつこいいw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0555n/>

---

短編 挑戦レッド

2010年10月9日04時18分発行